ドゥリーヨダナについて

**ドゥリーヨダナについて**

### ■ビーマ×ドゥリーヨダナの創作注意点(ドゥリーヨダナの場合)

・生前はビーマへ恋心を抱いていた(強くて正しくてカッコイイ)

・生前、ビーマとの一騎打ちに敗れてからは、強くて正しくてカッコイイのに俺の「卑怯さ」まで取らないでと思っている(卑屈)

・カルデアでは、ビーマに告白されたとしても、初めは信じられず、恥をかかされていると思う(両想いの場合は、少しずつほだされていく)

・カルデアでは、ビーマを懸想していても、受け入れてもらえないと思っている

・カルデアでは、お互いの思いが通じ合った場合、ビーマを身内判定に入れて甘やかし、ドゥリーヨダナからも甘える

### ■一人称

・普段は「わし様」幼少期「俺」

・素が出ると「俺」(内面の思考も「俺」)

・宝具発動時は「我ら」(百王子の霊基を内包しているため)

### ■ビーマへの二人称

・普段は「貴様」「ビーマ」「お前」

・喧嘩腰になると「貴様」

・呼びかけは「ビーマ」

・幼少期は「ビーマ」

・改まった場では嫌味を込めて「ビーマセーナ殿」

### ■性格と傾向

・すぐに人を嫉そねみ、羨み、そして憎む小心者ではあるが、同時に見捨てられない魅力を具えている

・懐柔したい相手に、金や地位や領土を与える対価として働きを求める(働き以外に好意を返されると理解できない王様気質)

・戦士、棍棒術の達人

・どんな汚い手でも負けるよりはよい

・身内に入れた者には甘い

### ■好きなもの

・イカサマ賭博(カルデアに賭博のカモと、賭博仲間がいる)

・カウラヴァ

・身内に入れた者達(お前はずっと、わし様の味方でおってくれよ)

・舌が肥えているので料理には厳しい

### ■苦手なもの

・恥をかかされることが嫌い(幾度となく恥をかかせてきた五王子たちが大嫌い)

・パーンダヴァ五王子(とくにビーマ)

・悪魔カリの化身と揶揄されること(生前の由来で)

### ■カルデアでの様子

・カルデアでは周回担当メンバー(マスターの素材集めに付き合わせられている)

・休みの日は、カルナやアシュヴァッターマンと自室でくつろいだり、賭博部屋に入り浸る

**■生前について**

・ドゥリーヨダナはインド古代叙事詩「マハーバーラタ」における主要登場人物の一人。アルジュナ・ビーマたち五王子と対立した百王子の長兄である。

彼の母親は聖仙により「100人の子を産む」と祝福を受けていたが、産み落とされたのは一つの肉塊であった。

聖仙がそれを分けて100個の壺に入れたところ、そこから100人の男子が生まれたという。

ドゥリーヨダナは五王子たちと事あるごとに反目し、彼らが王国を追放される原因となるイカサマ賭博を叔父と共謀して行った。

そして追放期間を終えて帰って来た五王子たちも受け入れず、一族全体を巻き込んだクルクシェートラの大戦争を引き起こすことになった。

クリシュナにも認められるほどの戦士、棍棒術の達人であったドゥリーヨダナだったが、最終的にはビーマとの一騎打ちに敗れ、アシュヴァッターマンに後を託して死亡した。

・クル族の長老ビーシュマの裁定により、成長したパーンダヴァ五王子とドゥリーヨダナたち百王子は領土を半分ずつに分けて暮らすことになった。

やがてユディシュティラは与えられた地を豊かにし、偉大なる王としての式を行う。

そこに招待されたドゥリーヨダナはその式のあまりの豪華さに圧倒され、様々な恥を掻かされ、再び嫉妬に狂った。

そこで叔父であるシャクニと共謀し、骰子さいころ賭博で五王子の全てを取り上げる計画を立てる。

賭博に目がないユディシュティラの弱点を突いたその計画は見事に成功し、結果として五王子たちは全てを失うことになった。１２年間を森で暮らし、その後の１年間を誰にも知られず暮らすことを強いられた。

１４年目になって彼らが帰還し、そして巻き起こったのがクル族の大戦争である───

・妹のドゥフシャラーについて

　盲目の王ドリタラーシュトラとガーンダーリーの間には、１００人の兄弟たちに加えて、ただ一人の女子がいた。

その名はドゥフシャラー。

ドゥフシャラーは母の「男子だけでなく女の子もいたらいいのに」という想いを受け、聖仙が最後に準備した１０１個めの肉塊から生まれたのだという。

後にドゥフシャラーはサインダヴァ族のジャヤドラタ王のもとに嫁ぐ。

ジャヤドラタ王はクルクシェートラの大戦争の際、ドゥリーヨダナ（カウラヴァ）側の味方として参戦し奮戦したが、最終的にアルジュナのその首を獲られた。

戦争後、アルジュナたちは馬祀祭アシュヴァメーダのために各地を巡ったが、そこでサインダヴァ族の地も訪れることになった。

当然ながら一触即発となったものの、ドゥフシャラーの勇気ある懇願により、アルジュナは戦闘を中止したという。

１００人の兄弟たちを殺され、夫を殺され、義理の家族たちを殺された。

恨みはあっただろう。憤りもあっただろう。

それでも、彼女は選んだのだ───憎しみの連鎖を終わらせることを。

血はもはや、充分すぎるほどに、流れていた。

### ■プロフィール

身長/体重：190cm・90kg

出典：マハーバーラタ

地域：インド

属性：秩序・悪　　副属性：地　　性別：男性

ドゥリーヨダナの一言：兄弟喧嘩には我関せずの主義。

### ■スキル

・悪のカリスマ：Ｂ－

彼の持つ人間味に溢れたカリスマを示すスキル。

彼はすぐに人を嫉そねみ、羨み、そして憎む小心者ではあったが、同時に見捨てられない魅力を具えていた。

様々な悪行や褒められない行為の結果として大戦争の引き金を引いたにも関わらず、カウラヴァ側の旗頭として大戦争を戦ったということは、彼についていく者もそれだけいたということである。

もし彼が単なる小悪党であったとしたらそれほどの人間はついてこなかっただろう。

クルの王族として、一定の魅力、評価される人間性を持っていたと考えられる。

とはいえ合わない者にはまったく合わない。

・凶兆の申し子：ＥＸ

彼が生まれたとき、様々な不吉な現象が起こったとされる。一族に災いを呼ぶとして、識者は王にその子を棄てることを勧めたが、王は受け入れなかった。

結果として彼は一族に滅びをもたらす大戦争を引き起こすことになる。

また、彼は悪魔カリの化身であるとも語られている。

### ■宝具

『一より生まれし百王子』

ランク：Ａ　種別：対軍宝具

レンジ：１～５０　最大捕捉：１００人

ジャイ・カウラヴァ。

「カウラヴァの勝利」「カウラヴァ万歳」を意味する。

ドリタラーシュトラとガーンダーリーの子たち、カウラヴァの長兄として、一つの肉塊より生まれた百王子たちを一斉に召喚する宝具。

同じ肉塊より生まれたものである以上、霊的には弟たちはドゥリーヨダナと同一存在であるとも言える。

その繋がりを利用して強引に喚び出される、武装した王子たちで構成された一軍。

その中にはドゥフシャーサナやヴィカルナなど名が知られている者もいるが、征服王の軍勢のように一人一人が全て名だたる英雄というわけではない。それでも彼らは古き時代、神話の大戦争を戦った者たちであり、五王子やドゥリーヨダナと同じように武芸を学んだ戦士。血の繋がりによる高い連携力を見せることで、大抵の相手はその数で押し切れる。

なお、程度の差はあれ、百王子たちの性格はだいたいドゥリーヨダナと似たようなもの。

つまりは基本的にロクデナシ集団である。

### ■ゲーム内のセリフ

・CV：藤沼建人

・ビーマがカルデアにいる場合

「ビィィーマがおるではないか！！？ マスターよ、なぜわし様というものがありながらあんな男を！ この浮気者！！ ───いや、ならばアピールだ。戦力としては互角でも、わし様の方が、イケメンだしぃ？ ヤツはすーぐ人も羅刹も二つ折りにする乱暴者だしぃ！？ それにー、その…………そうだ！ きっと足が臭ぁーーーい！！ 重用するのはわし様であるべきだぞ！」

・好きなこと

「好きなものは、勝利だ！！ つまり、絶対勝つギャンブルなどは涎が止まらんな！ んふふふふふふ……！」

・嫌いなこと

「わし様は恥をかかされるのが嫌いだ。つまり、幾度となくわし様に恥をかかせてきたあの五王子たちが、わし様は大嫌いだ！ ふーーん！！」

・聖杯について

「聖杯？ よく知らんが、それほどの財宝であればわし様の手元にあって然るべきであろう。うむ、献上してもらって構わんぞ？」

・召喚時

「我が名はドゥリーヨダナ！ドリタラーシュトラの息子にして百王子の長兄、すなわち、わし様こそが正当なるクル族の王である！……ん、なんでバーサーカーなんだ？最強にして最優の戦士でもあるわし様、普通はセイバーとかだろう？」

・バトル開始時

1「他に働き手はおらんのか？」

2「わし様の手を煩わせるな」

3「勝てるとでも思っておるのか？」

・スキル使用時

1「勝負するか？」

2「お前、死んだぞ？」

3「お前は負ける！」

4「本気を、見せてやるか！」

・コマンドカード選択時

1「よかろう」

2「ほっほぉう」

3「おぉいおい！」

・宝具カード選択時

1「お膳立ては整った！」

2「兄弟たちよ！」

3「見せ場というやつだ！」

・アタック選択時

1「華麗な動きであろう！？」

2「分を弁えろ！」

3「許可する！ ゆけぃ！！」

4「記念に死んでおれ！！」

5「これが賢いやり方だ」

6「ほらほら！ ぼーっとするな！」

7「こーんの幸せ者がぁ！！」

・エクストラアタック選択時

1「よぅしカルナ、やってやれい！」

2「ここだ！ アシュヴァッターマン！」

3「我が永遠の友よ！ それそれーい！」

4「わし様が手を下すまでもナーイ！」

・宝具発動時

1「此処にあるは我らが勝利。百の王子が集いて地を駆け吠える。蹂躙せよ、我が最強の軍団よ！ 『一から生まれし百王子(ジャイ・カウラヴァ)』！！」

2「んっふっふ……来たか！ これが最強にして最カッコイイわし様の姿！ 我が軍の前に敵はナァーシ！ 『一から生まれし百王子(ジャイ・カウラヴァ)』！！」

3「先に言ってやろう───勝ったな！！ なぜなら我らは百王子！ 五人の奴らの二十倍多い！！ 泣いて謝っても許してやらーん！！ ガッハッハッハッハー！！」

4「ほっほう、わし様の指揮が必要か。同じ肉より分かたれし我が弟達よ、そして無敵の友たちよ！ ぶっちゃけお前らに全部任せたーい！！」

・ダメージを受けた時

1「待て！ 金ならあるー！！」

2「はぁ？」

・戦闘不能時

1「わし様は……悪く、ないー……！」

2「何かの間違いだ！」

3「あとは、任せたぞ……！」

・勝利時

1「フッ、決まったな！」

2「よぅし！ 全部わし様のもんだ！！」

3「許せ。わし様が強すぎたのだ」

・レベルアップ時

1「いよぉし！ じゃんじゃん持ってこいじゃんじゃん！」

2「すー……飽きた。別のもん持ってこい」

3「わし様はわし様のために尽くす奴は好きだ。うむ、でかした！」

・霊基再臨

1「フッハッハッハ！ これがわし様の無敵の鎧よぉ！ ……だがそれにも、一つだけ弱点があってな。それはだな……鎧がない場所への攻撃は普通に痛いという事だ！！ なぜ全身鎧ではないのだ！？」

2「おぉいおーい、わし様と言えば有り余る財力だろう！？ 衣装が変わらんなんて許されるのかぁ！？ ケチケチしてんじゃないよぉ……！」

3「フッ、遂に真の姿が明らかになってしまったようだな。誰よりも高貴で、誰よりも知的な王子──それがこのドゥリーヨダナ様である！ どうだ？ 今までの気さくなお兄さんでありながら最強の戦士、というのもかっこよかったが、こういうのもいいものだろう？ アッハッハッハ！」

4「──正直に言おう。わし様はわし様の役に立つ奴が好きだ。ここまでわし様に貢いでくれるとはな。んん～、でかした！ よくやった！ お前は偉ぁ～い！！ 最強さを取り戻したわし様に、最早敵はない。お前と二人、欲しいものを手に入れるべく、何処までも邁進するのみであろう！ つまり……戦争だ」

・絆Lv上昇時

1「わし様は王子であり、未来の王である。相応の扱いをしてもらわねば困る。気を付けてくれよ？」

2「いいか、勝てん時に策略を使うのは何も恥ずかしい事ではないぞ。どんな汚い手でも負けるよりはよい。覚えておけ」

3「強い奴と戦う時は常に『強いなんて卑怯だぞ』と相手を非難する心持ちでおれ。そうすると、自分の方が正しい気持ちになれるからなぁ」

4「よぅし、更に強敵相手に使える台詞を一つ、教えておいてやろう。『強いくせに真面目に戦うなんて恥ずかしくないのか』、だ！！ 全力で相手に後ろめたさを覚えさせろ！」

5「お前が望むならなんでも与えてやろう。何が欲しい？ カルナにやったように、国でも与えようか。……遠慮するな。わし様はわし様の味方には決してケチらないと決めておる。だから……お前はずっと、わし様の味方でおってくれよ？」

・マスターとの会話

1「退屈にもほどがある！ おぉいマスター、どこか面白い所に連れてけ！ でなければ、暴れるぞ！？」

2「人は財の奴隷だが、財は誰の奴隷でもない。フッフッフ……つまり主従関係とは、そういう事だ。分かるな？」

3「このわし様をサーヴァントにできるお前は、最高の幸せもんだぞ？ その幸福を噛みしめつつ、わし様に最高の便宜を図るがいい」

・ラクシュミーバーイーがカルデアにいる場合

「ラクシュミーかアラクシュミーか知らんが……一瞬見ただけでそなたとは相性がよいと分かった。どうだ？ 一緒に茶でも……おぉい！ なぜ逃げる！？ おぉーーいっ！！」

・カルナがカルデアにいる場合

「おおぉカルナ！！ 心の友よっ！！ お前もいたのかぁわし様は嬉しいぞ！！ よぉし、また力を合わせてパーンダヴァの奴らに吠え面をかかせてやろうではないか！ なっ？」

・アシュヴァッターマンがカルデアにいる場合

「アシュヴァッターマンまでおるのかぁ！！ んふふふふ……勝った！ この戦い勝ったぞぉ！？ うむ、実のところ、わし様は夜襲とかうるさくは言わんとも。大義の前では勝つ事こそが大事だ」

・アルジュナがカルデアにいる場合

「アルジュナについてか……ヤツは好かん！ わし様のカルナを、卑怯な手で殺しおって！！ ……なに？ ここにいるだと？ おいっ、おぉい本当か早く言え！！ ……あ、わし様、ちょっとお腹痛くなってきたかも……。この話はまた今度な！」

・ガネーシャ神がカルデアにいる場合

「なに？ あのひたすらに食っちゃ寝しているだけのアレがガネーシャ神だと？ ……フッ、ハッハ。お前はもうちょっと冗談のセンスを磨いた方がよいな？」

・ヴリトラがカルデアにいる場合

「なに？ ヴリトラだと！？ はっはぁーん、さてはインドラにも匹敵する勇士であるわし様を脅威と見て、殺される前に殺すしかないとやって来たのだな？ ───おぉい待て！ ため息をついてどこに行く？ おーーい！」

・弟に似ているサーヴァントがいる場合

「ふむ。お前、弟か。弟だな？ そんな属性が強いオーラが出ておる。わし様、そろそろまた最高の兄として、崇められ称えられたい欲が沸き上がってきたところなのだ。だから……ほら、存分にわし様を誉めちぎってもよいぞぉ？ がぁ……タダとは言わん。最高の兄なのだから、こづかいくらいくれてやるわい！ 持っていけぇーい！」

・イベント開催中

「この賑やかさは、祭りか宴か？ きっとわし様を讃えるものであろう。ほーれ案内しろマスター！」

・マスターの誕生日

「ほっほぉ、お前の誕生日か。わし様のようにドラマティックな誕生ではないだろうが、めでたい日であるのは確かであろう。よし、何が欲しい？なんでも言ってみろ。こういう時のわし様は気前が良いぞぉ、王とはそういうものだ！」